

# 英語における主語コントロール述語から繰り上げ述語への歴史変化について

笠井俊宏

## 1. 導入

本稿では、現代英語において繰り上げ述語として使用されている形容詞 *sure* の通時的発達に焦点を当てる。

(1) John is sure to finish his homework.

(1)に示す *sure* は生成文法の枠組みでは繰り上げ述語として分析されるが、Traugott (1997)は動詞 *promise* が主観化により繰り上げ述語としての用法を持つようになった通時的変化を観察している。

(2) It promises to be a hot and grueling day. (1992 *Independent* [HECTOR])  
(Traugott (1997: 189))

Traugott によれば、*promise* は元々有生主語を選択するコントロール述語として遂行的な意味を持ち、それが今日では(2)に示すような虚辞を含む無生物主語を伴う遂行性を持たない用法も持つ。本稿では、歴史コーパスによる調査に基づき *sure* にも *promise* と同様の通時的変化が起こったことを主張し、Hornstein (1999)等で提唱されているコントロールの移動分析に基づき説明を試みる。

## 2. コーパス調査

本稿では、歴史コーパスとして The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second edition (PPCME2), The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME), The Penn Parsed Corpus of Modern British English (PPCMBE)を用いて調査を行った。その際、Traugott (1997)において *promise* の通時的変化が有生主語から無生物主語を選択できるようになったという観察を参考に調査を行った。(Watanabe (2011)においても、*be about to* が近接未来の用法を確立する際に同様の観察がなされている。) なぜなら、遂行動詞である *promise* を用いて話者が発話した際、その遂行動詞によって示される行為は話者によって行われるため、*promise* は遂行的な意味であるコントロール述語としての解釈になり有生主語に限られるからである。逆に、無生物主語を主語として取る場合には、その遂行性を持つことは不可能であるため、繰り上げ述語としての解釈になる。

表 1 *sure* が補部に不定詞節を選択する例の生起数

<i>sure</i> to infinitive (PPCME2, PPCEME and PPCMBE)										
	M1	M2	M3	M4	E1	E2	E3	L1	L2	L3
inanimate subject (raising)	0	0	0	0	4	0	4	5	0	3
animate subject (control or raising)	0	0	0	0	7	11	23	3	1	6

表 1 より、*sure* の出現当初の初期近代英語(E1-E3)では有生主語を取る割合が高いが、後期近代英語(L1-L3)には無生物主語の割合が増えていることが分かる。また、Denison (1993)では OED の記述に基づき、元々 *sure* は表層主語が経験者の  $\theta$  役を担う外項として現れる二項述語であると主張している。

(3) He is sure to return.

'He is sure of returning.'

(cf. Denison (1993: 243))

したがって、主語 *he* は経験者として *be sure* の項として現れ、(3)の *sure* は元々 *He is sure of returning.* の意味を示すこととなる。以上の観察より、*sure* はコントロール述語から繰り上げ述語へと変化したと考える。

## 3. 提案

以上の議論を踏まえ、本稿では *sure* は元々経験者の  $\theta$  役を担う有生主語を取るコントロール述語であり、外項に  $\theta$  役を付与する A\*としての位置づけを持っていたと考える。その後意味変化により話者の主観的判断を表すようになった結果、*sure* は外項を伴わない A としての位置づけを持つ繰り上げ述語へと変化したと主張する。したがって、主語コントロール述語と繰り上げ述語の間には密接な関係があることになるが、その関係は Hornstein (1999)等で提唱されているコントロールの移動分析により捉えることができる。

(4) [<sub>IP</sub> John [<sub>VP</sub> John [<sub>hopes</sub> [<sub>IP</sub> John to [<sub>VP</sub> John leave]]]]

(cf. Hornstein (1999: 79))

Hornstein によれば、コントロール述語の表層主語 *John* は不定詞節の外項として基底生成され、*leave* の  $\theta$  素性を照合し、不定詞節の EPP 素性を満たすために IP 指定部を経由して、主節の外項位置で主節の述語 *hope* の  $\theta$  素性を満たした後、最終的に主節の IP 指定部に移動し主格を付与される。この分析をコントロール述語としての *sure* に適用すると、(5)の構造になる。(なお、構造分析上関連のない箇所は省略する。)

- (5) For I am sure to lacke therefore, a tythe pyg or a goose: (STEVENSO-E1-P2,42.75)

[<sub>TP</sub> I<sub>i</sub> am [<sub>A\*P</sub> t<sub>i</sub> sure [<sub>TP</sub> t<sub>i</sub> to [<sub>v\*P</sub> t<sub>i</sub> lacke therefore, a tythe pig...]]]]

Hornstein の分析に従うと、主語 I は不定詞節の外項として基底生成され、不定詞節内の動詞 lacke の θ 素性を照合する。次に、不定詞節の EPP 素性を満たすために TP 指定部に移動し、sure は外項を必要とする A\* のステータスを持っているため、主節の外項位置に移動し sure の θ 素性を満たした後、最終的に主節の TP 指定部に移動し主格を付与される。

一方、sure が外項を取らない繰り上げ述語へと変化した後の構造は(6)のようになる。

- (6) And witte in children, by nature, namelie memorie, the onely keie and keper of all learning, is readiest to receiue, and surest to kepe anie maner of thing, that is learned in youghth:

(ASCH-E1-P1,11R.207)

[<sub>TP</sub> witte in children<sub>i</sub> is [<sub>AP</sub> surest [<sub>TP</sub> t<sub>i</sub> to [<sub>v\*P</sub> t<sub>i</sub> kepe anie maner of thing, ...]]]]

(6)においても、(5)と同様に主語の witte in children は不定詞節の外項として不定詞節内の動詞 kepe の θ 素性を照合し、不定詞節の EPP 素性を満たすため TP 指定部に移動する。次に、主語は不定詞節から主節へと移動するが、ここでは意味変化した後の sure は外項を伴わない A であると考えられるため、sure の θ 素性を満たすための移動は必要なくなり、主節の TP 指定部へと直接移動し主格を付与される。

このように、コントロール述語から繰り上げ述語への構造変化は意味変化が前提となるが、(5)と(6)の構造を比較すると、(6)の構造の方が移動の回数が3回から2回へと減っていることが分かる。この変化は Roberts and Roussou (2003) で提案されている経済性の原理と一致する。

- (7) A structural representation R for a substring of input text S is simpler than an alternative representation R' iff R contains fewer formal feature syncretisms than R'.

(Roberts and Roussou (2003: 201))

この経済性の原理を踏まえて再度(5)と(6)の構造を見てみると、(5)に示されるコントロール述語としての sure は外項に θ 役を付与するので、A\*P 指定部へ移動を駆動する θ 素性を持つことになる。一方、構造変化した後の(6)における繰り上げ述語としての sure は θ 素性を持たず、(5)の構造よりも素性の数が少ないため、この構造変化は(7)の原理に従っているといえる。

したがって、コントロール述語から繰り上げ述語への変化は、経済性の原理が統語変化の駆動要因になるという、近年の通時的言語研究の方向性とも合致することになる。

#### 4. 結語

本稿では、繰り上げ述語 sure の通時的変化について、先行研究及び歴史コーパスを用いた調査により、主語コントロール述語から繰り上げ述語へと構造変化したことを提案した。Traugott (1997) の分析に従って、主観化による意味変化を前提とし、sure が外項を取る A\* から、外項を取らない A へと変化したと仮定することにより、Hornstein (1999) 等で提唱されているコントロールの移動分析の下で sure の通時的変化を自然に説明することが可能となり、コントロールの移動分析を支持する通時的証拠を提示したことになる。

#### 参考文献

Denison, David (1993) *English Historical Syntax: Verbal Constructions*, Longman, London. / Hornstein, Norbert (1999) "Movement and Control," *Linguistic Inquiry* 30, 69-96. / Roberts, Ian and Roussou, Anna (2003) *Syntactic Change: A Minimalist Approach to Grammaticalization*, Cambridge University Press, Cambridge. / Traugott, Elizabeth C. (1997) "Subjectification and the Development of Epistemic Meaning: the Case of *Promise* and *Threaten*," *Modality in Germanic Languages Historical and Comparative Perspectives* ed. by Swan, Toril and Westvik, Olaf J, 185-210, Mouton de Gruyter, Berlin. / Watanabe, Takuto (2011) "On the Development of the Immediate Future Use of *BE ABOUT TO* in the History of English with Special Reference to Late Modern English," *English Linguistics* 28: 56-90.

#### コーパス

Kroch, Anthony and Ann, Taylor (2000) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*, Second Edition (PPCME2), University of Pennsylvania, Pennsylvania. / Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Ariel Diertani (2010) *The Penn Parsed Penn Parsed Corpus of Modern British English (PPCMBE)*, University of Pennsylvania, Philadelphia. / Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Lauren Delfs (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME)*, University of Pennsylvania, Philadelphia.